

訳あり食器でエコキャンドル

廃物使い、環境保護訴え 八千代



浅い傷が入ったりふちが欠けたりしている器を、キャンドルの器として利用する(八千代市村上、陶器店「山椒房」で)

天ぷら油などの廃油を、売りの物にならない陶器やガラスに流し込み型取ったエコキャンドルに火をともし、環境保護を訴える取り組みがある16日、八千代市内で始まる。

企画しているのは、同市村上のフランス料理店「貝殻亭」。今月いっぱい(定休日の20、27日を除く)、隣の洋菓子店を含め、店外照明の代わりに每晚50個のキャンドルで照らすため、キャンドル作りのボランティアを募集している。

同店を経営する「ジー・ピー・アイ」の社員が、系列の陶器販売店「山椒房」から、茶わんなどの陶器を仕入れる際、愛媛県の伝統

工芸品「砥部焼」の窯元で、傷がつくなどした「わけあり」の陶器を廃棄するとう話を聞き、「何かに使えないか」と考えたのがきっかけだという。こうした陶器を「廃物利用」し、キャンドルの型と容器に使うことを思いついた。

同社は窯元と県内のガラス会社2社から、販売できない陶器やガラスなど計約800個を無償で譲り受けた。これらの容

器に、使用后や消費期限切れの天ぷら油などの廃油を凝固剤で固めてキャンドルにする手順を記した文書を添え、同市村上の自治会に手渡した。

この結果、市民から50個のキャンドルが集まったほか、学校ぐるみで活動に賛同した村上小学校の児童らが320個のキャンドルを完成させた。

同社はこのほかにも、キャンドルを作ってくれる八

「広報やちよ」創刊1000号

市民の生活振り返る展示も

八千代市の広報紙「広報やちよ」がきょう15日発行で1000号を迎え、市民の暮らしぶりを広報紙で振り返る展示会「町から街へ、半世紀のアルバム」が17日から市郷土博物館(同市村上)で開かれる。17、18日には、アンケートに回答した先着50人に、市制10周年

記念で作られ、歌手の森昌子さんが歌う「八千代ふるさと音頭」のレコードが贈られる。

同紙は1958年創刊。現在は新聞折り込みで月2回、無料で発行しているが、市に残る資料によると、創刊当時は1部2円で不定期に郵送していた



1000号を迎える「広報やちよ」

千代、佐倉市内のグループ(5人以上)を募集中。条件は、貝殻亭まで容器と手順書を取りに行き、作ったキャンドルを持参できること。

貝殻亭などで作る「貝殻亭リゾート」の白杵一郎総支配人は「キャンドルの明かりを見て、市民の環境意識も高まれば」と期待している。問い合わせは同リゾート(047・481・6227)へ。

という。

会場には、創刊号から1000号までの全号を展示。68年発行の表紙には、当時、八千代市内に完成した「勝田台団地」に入居する親子らの写真が、84年発行の号には、東京まで野菜を売りに行く行商の女性ら



©RMN(Musée d'Orsay) / Gérard Blo

オルセー美術館展

パリのアール・ヌーヴォー

リュシアン・ボンヴァ

「銀製品」現代芸術

結